



神戸における在日中国人児童の学校教育実態及び母親の教育観－神戸中華同文学校、神戸の公立小学校を事例に－

宋, 晨陽

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2017-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6797号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006797>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

神戸における在日中国人児童の学校教育実態及び母親の教育観
—神戸中華同文学校、神戸の公立小学校を事例に—

氏名：宋 晨陽

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名 (主) 白鳥 義彦 教授
(副) 油井 清光 教授
(副) 濱田 麻矢 准教授

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

本研究は日本定住の華僑・華人の子弟教育に関わる諸問題と現状、日本社会における多文化・多言語教育問題などを側面から捉え、また兵庫県神戸市内の華僑学校と日本の公立小学校を焦点として比較分析を行い、在日中国人児童の学校選択問題や親の子育て教育方式、教育理念に注目して考察したものである。

第一章では「在日華僑子弟の学校教育における先行研究」を分析する。従来の華僑研究の成果と著作の紹介と本研究で利用したい華僑学校に関する著作や雑誌、インターネット情報などを収集して検討した。そして、本研究に関する多言語・多文化教育やカリキュラムの開発などの文化的、社会的、教育学的な学術的な研究からの学校教育ことを表したい。また、個人のインタビュー調査で、海外中国人親たちの子育てライフコースを外観し、教育に対する中日観点や中日学校の違いを利用して、海外の中国人母親の教育に対する認識や教育観の変化について従来の仮説を検討し、新しい仮説を構成することによって理論的な研究をする。

第二章から第四章までは、華僑学校に関する内容である。まず、在日各華僑学校の歴史を紹介の上、特に事例とする神戸中華同文学校の歴史と現況を確認する。学術上では常に横浜の学校と神戸の学校と比べて研究することが多かったが、本研究では華僑学校間の比較研究をしていない。しかし、一般人でも理解しやすいため、両学校の相違点を簡単に紹介し、神戸中華同文学校の特徴を研究対象として強調したいのである。

第三章では、神戸中華同文学校に対するインタビュー調査の内容とまとめである。現地調査では、筆者が学校の公開活動(運動会や遊芸会など)へ見学し、学校の新老華僑教師へ個別で訪問した。その中には、もう退任した教師や近年の在籍教師が両方いる。個人情報のため、教師の個人情報については公開しない。その調査内容と学校の公式HPの情報から、全体学生数、教師数と出身地、新老華僑生徒や日本人生徒の割合などを明確化した。明確化したところ華僑学校の教育実態について把握でき、華僑の子弟教育に関する様々な問題点を分析することができた。また、卒業した生徒の母親へも訪問インタビューを行い、その中には、中国人親と日本人親、両方いる。彼らの調査内容により、神戸中華同文学校の現在の現状と問題点を把握することができ、学校の全体像を描くことができる。さらに第四章で、第二章、三章の内容から、神戸中華同文学校の変化と問題点を挙げ、解決方策を考える。日本やいわゆる神戸地域社会の中で、華僑学校の重要な位置を明確する。

異なる言語、文化、社会背景を持つ外国人の日本での定住化は、日本社会の国際化をもたらしたとともに、地域社会にも多文化、民族化の課題を与えた。国際化が単なる概念だけではなく、地域で生活する人々の身近な事象となっているのである。そして、この日本社会の多文化、多民族化は在日華僑学校教育にも大きな影響を与えている。日本社会の国際化とともに、華僑社会模範化を見せている。時間に

つれ、在日華僑社会内部では世代交代が行われ、中国との関連が多く、純粋な民族性を守る意識が強かった華僑1世、2世から、生活、教育、交友などの側面で日本社会への同化が進んだ若い世代へと中心が移動しているようである。現在老華僑のなかで日本人（帰化者も含む）との結婚率は90%を超えているほど、生活全般における日本化傾向が進行しているという。

一方、1972年中国交回復後、中国と日本の交流が頻繁になり、とくに1978年に中国が改革開放政策を採用した後、来日する中国人が毎年増加している。これらの新たに来日し、日本社会で居住する人々、いわゆる新華僑は在日華僑の8割以上を占めている。新華僑は留学を経て就職した人や、日本人配偶者として来日する人など、来日の目的と背景の違いから、生活状況も大きく異なっている。従来の華僑社会のようにある地域に集中して居住する、または一定の職業に集中するのは異なり、新華僑の場合は日本人居住地域に混雑するケースが多く、職業に関しても幅広い分野にわたっているのが大きな特徴である。特に、新華僑の積極的な日本社会への参加と、華僑社会における発言力が高まっていることが注目されている。この老華僑の日本化と新華僑の参入は華僑社会の内部構造の多様化をもたらし、当然華僑学校の教育へも影響を与えることになる。

そして、現在華僑学校で直面しなといけない問題が新老華僑の意思疎通である。老華僑の伝統的、保守的意識と新華僑の新思想、新観点との間の摩擦と論争は激しくなっているようだ。また、人気校となった神戸中華同文学校では、生徒の募集制度は、校友の子供は優先入れるし、校友と関係のない新華僑子弟も100%入れるとは言えないので、日本人子供の募集にはもっと少なく、入るのは難しいという状況でよく言われている。各地域の組織と華僑同士からの支援だけでは維持することができるが、学校規模の拡大は難しい。学校の設備の増加、場所の変動、教師の雇用など様々な所でお金を使わないといけないので、資金不足の問題は深刻になっている。

神戸中華同文学校は117年の歴史を超える何世帯もの老華僑の経済力と団結力で維持した中国人学校である。中国語を主語として中国伝統文化や道德教育を重要視する。近年では、違う文化背景を持った新華僑教師と生徒の増加により、現行の中国語科目の教育方式や教科書の使用などに対して不満や疑問が生まれていた。調査をした結果、新老華僑教師の努力により相互理解が見られ、学校側の中国語教育についての改革の姿も少しずつ認められていた。また、神戸中華同文学校は日本のインターナショナル・スクールとして、自己の文化を保持したまま、日本文化と融合したことにより、個性を持った新文化を創出する場として、特殊な位置を有している。いわば、「華僑学校」の中で、「二文化人」を生み出し、さらに融合させた「新文化」を創造する場であることを実証する。

一方、日本の公立小学校では公的に在日外国人の母語教育への支援を行っている。本研究は神戸市内にて中国語教室を開設している神戸小学校、神楽台小学校、山の手小学校の3校へ現地調査を行い、ま

た、それぞれの学校の中国語教室担当教師へ聞き取りを行った。この三か所の公立小学校では、「中国語教室」の性格は異なるし、教授教師や目的も違っている。神戸市立小学校では、日本人の日本語指導先生と中国出身（永住者）の中国語指導先生は両方がいる。神楽台小学校では、中国出身の教師を雇用しているか、留学生出身であった。神戸市山の手小学校では、教室の整備まだ中途半端で、教師は一名、教授内容があまりない状態である。公立小学校での中国語教室の現況、授業にて使用する教科書と授業進行の様子、授業時間及び学生状況などについて明確化するうえで、神戸中華同文学校の中国語授業と日本の公立小学校の中国語授業との比較分析を行った。結果、各学校に通う生徒の親が学校選択を行うことで重要視することは「言語や文化についての重視度」「子供の教育に対する認識」「子供の将来の人生設計に関わること」と判明した。

第六章の在日中国人母親たちの子育て日常生活リズムと教育観である。華僑学校と公立小学校の両方である中国語教育現状と問題点などを明らかにしたうえ、神戸地域で住む9人程度の母親へインタビュー調査をして、具体的にどのような子育てに対する教育認識を持っているのか、神戸では様々な学校が整備している中で、子供にどの学校へ送るべきなのか、経済的な原因どのように子供教育へ制約しているなどという質問をした。海外に住む子育ての中国人母親の思いや生活の大変さなどを明確して、まとめた。さらに、以下の3つの仮説を考えて、インタビュー調査した内容を通じて実証する。

仮説1. 子育て時間の長さ、子供の「陪伴（そばにいる）」時間の長短により、子供の心理的成長に影響し、親の教育観念により左右される。

仮説2. 子育てに対する経済的投入が親の教育認識や周りのママグループの影響により左右するし、家庭の経済条件と関わるが、子育ての必要条件とは言えない。

仮説3. 親自身の行為や言葉、生活方式、子供への対応や態度により子供の将来に影響する。

終章においては、第一部分である神戸中華同文学校、第二部分である神戸の公立小学校、と第三部分の母親の教育観などの諸インタビュー調査から、すべてその内部の関連性を取り上げ、さらに本研究から得られた結論を通じて、今後のもっと詳しい研究展開を計画する。

最後に、神戸中華同文学校の関係者や母親たちおよび神戸の公立小学校の教師、と神戸市内に住む散発的な華僑親たちをすべて含め、教育についての観点や疑問を取り上げ、在日中国人母親たちの教育観を概観し、各章における調査分析の結果により、得られた知見と今後の課題を明らかにする。親の経済条件、学歴、教育認知度などを調査し、一日の生活の中で子育て時間は何時間持てているかについて調査した。子供中心主義の現在、子供の言語や文化、学校選択、環境の適応性、そして将来像などについて重視をしなければならない。

諸調査により、伝統教育観を持つ中国人母親たちでは、海外へ移住しても、現地生活や文化へ融合し

ても、子育て方式や教育観念を現地の教育制度や教育環境に制約される。そして、子育てのことに対して、関心度が中国国内の親よりさらに高い。ある程度、生活環境の変化により子供を自由放任させようとする親がいるが、経済的に全力教育支援で厳しいタイガーマザーとしての親がさらに多い。また、社会環境の改変により親の教育観の改変へ多少影響するが、現地環境への適応性がさらに重視される。親の教育方式や教育観念が何世代の中国式伝統教育思想からの深く影響で、簡単に変換することができない。本研究は、海外にて子育てをする母親に対し、学校選択方法や文化の伝承と認識側で幾つかの提言をする。

論文審査の結果の要旨

氏名	宋 晨陽
論文題目	神戸における在日中国人児童の学校教育実態及び母親の教育観 —神戸中華同文学校、神戸の公立小学校を事例に—
要旨	<p>本論文は、日本社会における多文化・多言語教育問題といった大きな枠組みのなかで、神戸中華同文学校と神戸市立の公立小学校に焦点を当て、インタビュー調査を通じて得られたデータなども用いながら、神戸に住む華僑・華人の子弟教育に関わる諸問題と現状、在日中国人児童の学校選択問題や親の子育て教育方針、教師ならびに親の教育観などについて明らかにしようとする論文である。</p> <p>序章では、本論文の問題の所在、本論文で用いられる概念の整理、研究方法、全体の構成等が提示され、論文の枠組みが設定される。</p> <p>第一章では、在日華僑子弟の学校教育についての先行研究の分析、整理がなされる。神戸の華僑社会は、1868年の神戸開港による外国人の来往を契機として形成され、1900年代には神戸中華同文学校が神戸在住の老華僑によって設立された。従来、中華同文学校は老華僑の子どもの民族教育の場だけではなく、老華僑の精神的拠り所であり、大陸系と台湾系が共生する神戸の華僑社会のシンボルともなってきた、とされる。一方で近年においては、華僑以外の子どもも受け入れて多文化教育を行う学校として、「インターナショナル・スクール」としての側面も見出されることが指摘される。</p> <p>第二章では、東京中華学校、横浜中華学院、横浜山手中華学校、神戸中華同文学校、大阪中華学校といった、日本における華僑学校の歴史と概況が示される。神戸中華同文学校については、創設以来の歴史とともに、生徒数、教育課程、学校組織、教師組織、学生の出身、国籍、居住地、親の職業、卒業後の進路などの基礎的なデータが、以後の議論の前提として示される。</p> <p>第三章では、神戸中華同文学校でのインタビューからの知見をもとに論が展開される。まず老華僑および新華僑の教師へのインタビュー、次いで老華僑および新華僑の親へのインタビューという形で、老・新華僑の教師および親の考えが対比的に提示される。教師たちからは、現在の在校生は、老華僑の子ども、新華僑の子ども、日本人や他の国の子どもがそれぞれ約三分の一となっており、老華僑や日本人の配偶者の子ども、一部の新華僑の子どもを含め、日本国籍を有する子どもが相当数にのぼるといふこと、老華僑の教師と新華僑の教師との間の関係や、新華僑の教師が次第に多くなってきている状況、学校の教育方針として子どもの社会参加や実践能力の育成を重視していること、学校の伝統活動、中国語教育などについて述べられる。親からは、中華同文学校へ子どもを入学させた経緯や、子どもの教育についての考え等が述べられる。全体として、華僑ネットワークの強さ、神戸中華同文学校の中国語、日本語、英語の三言語教育という特徴、教師や親の教育観が明らかにされる。</p> <p>第四章では、転換期にある中華学校の教育改革について論じられる。特に、中国国内で用いられている中国語の教科書と、中華同文学校で用いられている中国語の教科書との比較を通じて、中華同文学校における中国語教育の課題や、新たな方向性についての論述ならびに考察が行われるとともに、老新華僑がともに存在することによる改革の困難さなどについての分析も進められる。</p>
主査記載 氏名・印	白鳥 義彦

第五章では、日本の公立小学校に議論の対象が準じられ、中国語の母語教室を開設している神戸市内の公立小学校への訪問調査を通じて、華僑の子どもに対する日本語指導と中国語指導の実態や学習の状況などが明らかにされる。2016年の文部科学省のデータによれば、公立の小学校、中学校、高等学校、中等教育学校および特別支援学校に在籍する、日本語指導が必要な外国人児童生徒は2万9198名で、そのうち母語が中国語の者は6410名である。兵庫県には、日本語指導が必要な外国人児童生徒は802名、うち母語が中国語の者は251名いるとされる。神戸市には、中国語の母語教室を開設している小学校は3校あり、派遣を含めてそれぞれ日本語教師、中国語教師がいる。中国語の授業は放課後に行われている程度で、学ぶ時間が十分に確保されているとは言いがたい面があり、生徒たちの母語レベルにもばらつきが見られる。教師たちが、中国人生徒のアイデンティティ意識と中国語能力、親の在留意識や在留ビザの問題が生徒の将来に影響を及ぼす可能性などを指摘していることも論じられる。

第六章では、新華僑の親たちの日常生活リズムと教育観について論じられる。まず、共働きの母親と専業主婦の母親では当然のことながら日常生活リズムは異なる側面がある。また共働きか専業主婦かということは、家庭の経済状況を反映している側面もある。しかし、いずれの親も、子どもの教育は重要なことと考えている。また、子どもの教育にかかわる支出額に応じて、親の教育観の類型化も試みられている。特に支出額の大きい層については、「タイガーマザー」であり、「子供中心主義的」であるとされている。

終章では、本博士論文の全体のまとめが示される。異なる言語、文化、社会背景をもつ外国人の日本における定住化は、日本社会の国際化をもたらすと同時に、地域社会にも多文化共生という課題を与えた。国際化が単なる概念レベルのみならず、地域で生活する人々の身近な事象ともなった。そして、この日本社会の多文化化、多民族化は、在日華僑学校教育にも大きな影響を与えている。また、老華僑の日本化と新華僑の参入という要因は、華僑社会の内部構造の多様化をもたらし、華僑学校の教育へも影響を与えることになる。この文脈で、老華僑の教師と新華僑の教師との教育観も対比的に示される。一方、神戸中華同文学校と中国語教室を設置している神戸の公立小学校との比較を通じて、中日における教育文化の違いも明らかにされた。さらに、家庭の経済状況、子どもが将来どこに住むと考えるか、母語教育に対する認識、周りの親からの情報の受け取り方等、さまざまな要因によって、親の教育観が多様性を見せるようになることも論じられた。

本論文は、神戸中華同文学校を主たる対象とし、同時に対比として、中国語教室が設置されている神戸市立の公立小学校の状況にも着目しながら、教師、親の教育観という論点を軸に据えつつ、華僑学校やひいては華僑社会の姿容をも明らかにしようとする意欲的な論文である。インタビューから得られた知見をもとに、実態に即した分析を行うとしている点、老華僑と新華僑との関係のダイナミクスをとらえようとしている点、華僑社会の側からのみならず日本社会の側からの比較考察の視点を有している点などは、とりわけ評価に値する。

以上のことから、審査委員会は一致して、学位申請者 宋晨陽 は、博士(文学)の学位を得る資格を有すると認める。

審査委員

区分	職名	氏名	区分	職名	氏名
主査	教授	白鳥 義彦	副査	准教授	平井 晶子
副査	教授	油井 清光	副査	准教授	佐々木 祐
副査	准教授	濱田 麻矢			